第２分科会

研 究 主 題

いきいきと運動や心身の
健康づくりに取り組む児童の育成

―豊かなかかわり合いを通して―

松江市立乃木小学校

日　　程

9:00	9:30	9:40	10:00	10:15	11:00	11:15	12:00	13:00	13:25	13:35	14:25	15:00	15:10
受付	開会行事	研究発表	移動・休憩	公開授業①（２年　５年）	移動・休憩	公開授業②（４年　６年）	昼食・休憩	※授業協議 授業別	移動・休憩	研究協議 雑賀小発表	指導講評	閉会行事	

公開授業案内

	学年・単元名	会　　場
公開授業①	２学年・体つくり運動	第２体育館
	５学年・ハンドボール	第１体育館
公開授業②	４学年・体つくり運動	第１体育館
	６学年・病気の予防	４Ｆ多目的ホール

学校所在地図

交 通 機 関

バ　　ス：松江市営バス　松江駅発
南循環線・内回り　乃木小入口下車
徒歩５分

タクシー：ＪＲ松江駅からおよそ10分（1200円程度）

学校概要

学校名称	松江市立乃木小学校		
校長氏名	古津　周治		
学 級 数	３１学級		
児 童 数	１００４名		
所 在 地	〒690－0044　松江市浜乃木５丁目１番10号		
電　　話	0852－21－2032	Ｆ　Ａ　Ｘ	0852－21－2819
Ｕ Ｒ Ｌ	http://www.nogi.matsue.ed.jp/	Ｅ-ｍａｉｌ	school-e@nogi.matsue.ed.jp

【学校紹介】

◎　学校概要

本校は松江市の南西に位置し，校区面積約6.87平方キロメートルの広さであり，宍道湖に接している。

校区内には，島根県立大学短期大学部及び公私立高校が４校あり，地域の人々の教育への関心は高いものがある。また，学校の近くにある松江市総合運動公園は，第37回国民体育大会（くにびき国体）の主会場となっており，運動に親しむ環境が整っている。

かつては，自然豊かな農村であったが，卸団地の造成や国道の移転，嫁島公園線，県道上乃木菅田線の開通によって急速に開発が進み，団地やマンションなどの増加が著しく，人口増加が急増して県下有数のマンモス校となった。

平成10年には，高速道路松江道路が開通したうえ，平成17年には松江市立病院が完成，隣接する田和山史跡公園や田和山地区新商業ゾーンと併せ，校区の状況が更に変化してきている。

◎　学校教育目標

「学ぶ喜びを知り，夢に向かって挑戦する乃木っ子」の育成

○　めざす学校像・・・・笑顔あふれる元気な乃木小学校

○　めざす子ども像・・・瞳を輝かせて学ぶ乃木小の子ども

①　知：進んで学ぶ子
生涯にわたって学び続ける土台を作る時期と考え，基礎基本の習得を大事にしながら，受身ではなく能動的・持続的に学び続ける子どもを育てる。

②　徳：心の温かい子
自分をいとおしむと共に，他人の存在を尊重し，優しい心と思いやりの心をもって人に接する子どもを育てる。

③　体：たくましい子
困難なこと，継続を要することに負けないで，自らの力で乗り越えていける心身共にたくましい子どもを育てる。

研究主題

いきいきと運動や心身の健康づくりに取り組む児童の育成
ー豊かなかかわり合いを通してー

松江市立乃木小学校

1　研究主題設定の理由

近年，家庭や地域社会など，子どもたちを取り巻く社会環境は大きく変容している。こうした時代における子どもたちには，まさに「生きる力」を身につけることが重要であると考えられる。そして，その「生きる力」の基盤とも言うべき「健やかな体」を育てるために，体育科は重要な役割を担っていると言えよう。中央教育審議会答申には「体育科，保健体育科については，その課題を踏まえ，生涯にわたって健康を保持増進し，豊かなスポーツライフを実現することを重視し改善を図る。」とある。その課題として，運動する子どもとそうでない子どもの二極化や体力の低下，生涯にわたって運動に親しんだり健康を管理したりする資質や能力の育成が十分に図られていないことなどがあげられている。こうした課題を解決するために，運動の楽しさを味わわせるとともに，運動や健康に関する基礎的な知識や身体能力を身に付けさせることが重要である。更に体育については，体を動かすことが身体能力を身に付けるとともに，コミュニケーション能力を育成することや論理的思考力をはぐくむことにも資することを踏まえて，発達段階のまとまりを考慮し，指導内容の体系化が図られた。体系化を図ることで，二極化や体力の低下の課題を解決しようとしている。

また，本校の学校目標は「学ぶ喜びを知り，夢に向かって挑戦する乃木っ子」の育成である。困難なことにもくじけない強い心を持ち，仲間と豊かにかかわり合いながら，夢に向かって挑戦する子どもを育てていきたいと考えている。本校の児童も全国的な傾向と同じように，運動する子とそうでない子の二極化や運動経験の差がある。また，技能面の差によって体育に苦手意識をもっている子もいる。そして，家庭環境の変化や食・生活習慣の乱れ等から，睡眠不足や偏食，視力の低下などの課題も現れてきており，運動面だけでなく，健康全般に課題があるととらえている。これらのことから，今の子どもたち一人ひとりが運動や心身の健康づくりに主体的に取り組むだけでなく，生涯にわたって運動に親しみ，自らの健康を適切に管理していく力の基礎を養っていかなければならないと考える。

更に，本校は近年「対話力」の育成をめざした学習にも取り組んでおり，その成果が少しずつではあるが見られるようになってきている。また新しい学習指導要領では各教科で「言語活動の充実」が求められているが，これは本校のこれまでの研究と重なるところが大きい。体育科においても，知識や思考力・判断力を育んだり，楽しく学習したり，技能を伸ばしたりするためにも，友だちとのかかわりの中で見つけたことや気づいたことなどを伝え合い，分かり合うことが大切ではないかと考えた。

以上のことから，豊かなかかわり合いを通し，運動や健康に関する基礎的な知識や身体能力を身につけさせることによって，いきいきと運動や心身の健康づくりに取り組む児童が育つと考え本主題を設定した。

2　研究主題の捉え

「いきいきと運動や心身の健康づくりに取り組む」とは，生涯にわたって健康を保持増進し，積極的に運動やスポーツに親しむことである。そのために必要な身体能力や基礎的な知識などを体育や保健の学習を通して身に付けさせていくことが大切である。その際，授業の中に，技能面，情意面，知識面をプラスの方向（よりできる，より楽しい，よりわかる）に変容させることができるか

かわり合いを取り入れていく。このようなかかわり合いを通して学んだ，知識や身体能力を生かし，主体的に運動し，自他の健康について考えて生活する児童の育成を図っていくことをめざしている。

3　研究目標

いきいきと運動や心身の健康づくりに取り組む児童を育てることをめざして，豊かなかかわり合いを生むためにはどのような手だてが有効であるかを実践を通して明らかにする。

4　めざす児童生徒像

かかわり合って

（1）ともに伸びようとする子　（2）わかる，できる子　（3）学んだことを生かす子

5　研究仮説

運動の特性や身近な生活の中での健康安全に関する課題に応じた手だてを工夫すれば，「わかる・できる・たのしむ」姿につながる豊かなかかわり合いが生まれ，いきいきと運動や心身の健康づくりに取り組む児童が育つであろう。

6　研究内容・方法

子ども同士が豊かにかかわり合いながら，ねらいを達成するために，以下のような手だてを工夫する。

（1）課題設定

・かかわり合いに必然性を生む運動の特性や健康安全に関する課題

・ねらいを達成するための意欲や意識の高まりを生む課題

（2）運動の特性や，健康安全に関する課題に応じたかかわり合いを取り入れた展開

①かかわり合いの場

・課題を把握する場　・課題を解決しようとする場

・見直す場　・高める場　・振り返る場

②かかわり合う相手（「個と個」「個と集団」など）

・二人組の相手　・グループ内

・グループ間　・学級全体

③かかわり合い方（姿）

ア　言語を介してのかかわり合い

・アドバイス，評価　・対話，話し合い

・応援，励まし　・称賛，認め合い

イ　言語以外のかかわり合い

・一緒に運動する

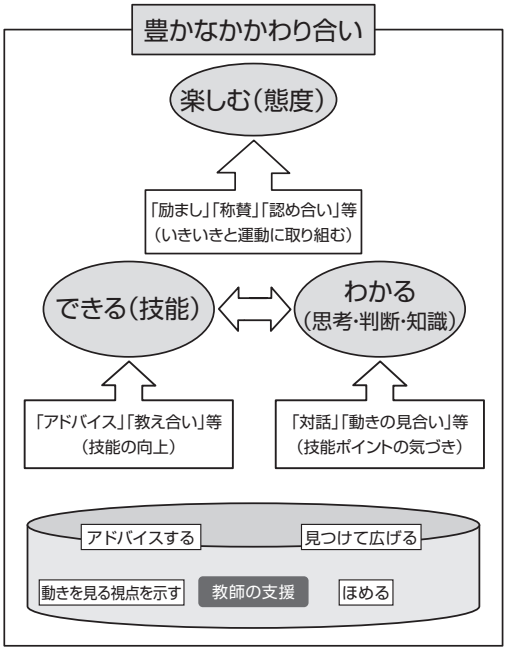
・動きなどを見合う　・補助する

（3）子どものかかわり合いを支える教師の支援

・動きなどを見る視点の提示

・技能ポイントの提示

・モデリング（よい動きをする子の紹介）



7　研究の実際

【実践事例１】　第２学年

（１）単元名　　わ・ぼうとなかよし（体つくり運動　多様な動きをつくる運動遊び）

（２）単元の目標

○輪･棒を操作したり，用具の動きに合わせて体を動かしたりして，運動遊びをすることができる。（運動）

○きまりを守り，友達となかよく力を合わせて，楽しく運動遊びをしようとしている。（態度）

○輪・棒を操作する運動遊びのこつを見つけたり，新しい動きを考えたりしている。（思考･判断）

（３）指導の意図

本単元では，子ども達が豊かにかかわりあう中で用具を操作する運動遊びのこつを見つけたり，基本的な動きを身に付けさせたりしたいと考えた。本単元で期待する豊かなかかわりとは，できた児童がまだできない児童にアドバイスする，友達に動きを見せる，できない児童はできた児童に尋ねる，動きを見せてもらう，二人で課題解決の方法を話し合う，励まし合う，認め合うなどである。

友達同士のかかわり合いの場を目標達成の手段として設定すれば，体を動かすことの楽しさや心地よさを味わいながら基本的な動きを身に付けていくことができるだろうと考えた。

そこで，以下のような手立てを考えた。

①一人で行う運動遊びで，動きのこつを確認しながら基本的な動きを身に付けることができるようにするためのかかわりの場の設定

②身に付けた動きを活用し，二人組でかかわり合いながら課題達成に向けて挑戦する場の設定

（４）指導の実際

①一人で行う運動遊びで，動きのこつを確認しながら基本的な動きを身に付けることができるようにするためのかかわりの場の設定～ミニ先生の活用～

本時では，まず前時に経験した一人で輪を操作する運動遊びの中から転がす，バックスピン，回す，跳ぶの４つの動きをそれぞれの場で練習する時間を取った。その中で，うまく動きができている児童を見つけたら，帽子の色を赤色に変えていった。帽子が赤色になっている児童がミニ先生である。まだできていない児童には，動きに困ったらミニ先生を見たり，教えてもらったりするとよいことを助言した。また，ミニ先生になった児童には，みんながミニ先生になれるように白帽子の友達に積極的にかかわることを促した。こうすることで，自分の動きを言語や動きを介して伝える力が身に付いたり，ミニ先生自身の動きがより確かなものになっていったりすると考えたからである。

②身に付けた動きを活用し，二人組でかかわり合いながら課題達成に向けて挑戦する場の設定～チャレンジタイム～

それぞれが経験した一人で輪を操作する動きを活用し，やや難しい運動遊びに二人組で挑戦する場としてチャレンジタイムを設けた。その理由として，二人での運動遊びの動きを身に付けるとともに達成感や喜びを味わえることも期待したからである。本時の課題は，「一人が転がした輪を倒さないようにしてもう一人がくぐってみよう」とした。また課題提示の際に「うまくいくひみつをみつけよう」と投げかけた。二人で話し合いながら運動のこつを見つけることに迫れると考えたからである。直後の活動では，こつが分かっていないのでただ漠然と運動

を続けたり，試行錯誤をしながらも課題達成までは行かなかったりする二人組がほとんどだった。そこで，全体を集め，うまくいった二人組を紹介したり，こうしたらできそうというこつを言葉や動きで発表したりする場を設けた。そこで出たこつは，「輪を転がすスピードをゆっくりにする」「くぐる人は足，腰，頭を曲げてしゃがんでくぐる」などである。チャレンジタイムの後半ではこれらのこつを使おうと声を掛け合いながら練習したり，成功したりする二人組が若干増えた。中には輪が倒れるまでに２，３回くぐる二人組もあった。

（５）考察

①ミニ先生を活用したかかわりの場の設定について

ミニ先生を活用したことで教師が個別に支援に当たるよりも，子ども達同士の言語や動きを介してこつが広がっていったので，動きができるようになった子の広まりが早く，効率的であった。また，豊かなかかわりの手立てとしてミニ先生を設定したが，児童の中ではミニ先生になることが一つのステータスとなっているところもあり，運動遊びに意欲的に取り組むという観点からも有効であった。

②課題達成に向けた二人組でかかわり合う場の設定について

活動の途中で全体を集め，うまくできた二人組を紹介したり，こうしたらできるという事を言葉や動きで発表したりすることで動きのこつの共有化を図った。チャレンジタイム後半の活動ではそこで出たこつを試したり，それを元に新たな動きの工夫を考えたりしている二人組が増え，その結果，課題を達成する二人組も増えた。このことからチャレンジタイムを設定したことが有効的に機能したと考える。

しかし，全ての二人組に達成感を味わわせることができなかった理由として以下の2点を課題として捉えている。一つ目は，出たこつを動きとして“見る”，言語として“聞く”だけであったので，全員で実際に“体を使って”実証してみる時間を設定する必要があった。二つ目は，出たこつを試すことができるような十分に広い場所が用意されていなかったことである。活動場所の保障について吟味する必要があった。

【実践事例２】　第４学年

（１）単元名　　短なわとび・めざせ！スーパー３級（体つくり運動　多様な動きをつくる運動）

（２）単元の目標

〇短縄の回し方や跳び方など基本的な体の動きを身に付け，調子よく短縄を跳ぶことができる。（運動）

〇用具の取り扱いのマナーに気をつけ，互いのよいところを認め合いながら，進んで体を動かそうとしている。（態度）

〇友達のよい動きを見つけたり，調子よく跳ぶためのこつを見つけたりしながら，自分の動きに取り入れようとしている。（思考・判断）

（３）指導の意図

縄跳び運動は，いつでもどこでも気軽に取り組むことができ，児童の日常生活に広がる可能性をもつ教材であり，動きのこつについて児童自身が気づき，教え合うなど，知的な深まりも期待できる。本単元では，二重跳びを中心とした短縄の技の習得を目指し，友達とかかわり合いながら練習方法を工夫したり，オリジナルの跳び方を考えたりするように計画した。本学級の児童は，運動が好きで，友達と助け合いながら学習することを好む傾向がある。縄跳び運動においてもリズム縄跳び（太田昌秀元上越大学教授考案）の進級に意欲的で，休み時間にも進んで練習する姿が見られた。しかし，連続の二重跳びができる児童はまだ３分の１程度で，連続二重跳びのある３級のところで意欲もやや停滞していた。そこで，本時では，連続二重跳びができる児童を含んだ３人グループで練習し，教え合ったり励まし合ったりしながら，連続二重跳びに挑戦し，みんなで３級進級を目指すこととした。その中では，教え合うポイントを焦点化し，互いに意識してアドバイスし合うこと，そのポイントに合った練習方法を選び，助け合いながら練習することを大切にした。

（４）指導の実際

①二重跳び習得のポイントを焦点化したグループ練習

児童は，前時までに苦手な技の練習を３人グループで行い，アドバイスし合うためには，ポイントを絞って見ることが効果的であると気づいた。そこで，前時の二重跳びの練習では，「手」「足」「姿勢」「リズム」「その他」にポイントを絞り，それぞれのポイントごとに，「手首を速く回す」「脇をしめた姿勢」など，話し合ってこつをまとめた。さらに本時では，グループごとに「ポイントカード」をもち，互いに見合いながら，「もう少し脇をしめてみたら。」「手首が小さく速く回っているよ。」など，具体的な声かけをするように促した。また，連続二重跳びができる児童は，帽子の色を変え，「お助けマン」として積極的にアドバイスする姿を期待した。上手に教え合っているグループでは，自分では気づかなかった姿勢についての課題を教えてもらい，意識して練習しようとする姿が見られた。しかし，「ポイントカード」を使いながらのアドバイスという手法に手間取り，うまくかかわることのできなかったグループや，友達の課題とされるポイントを的確に見つけられない児童もあった。

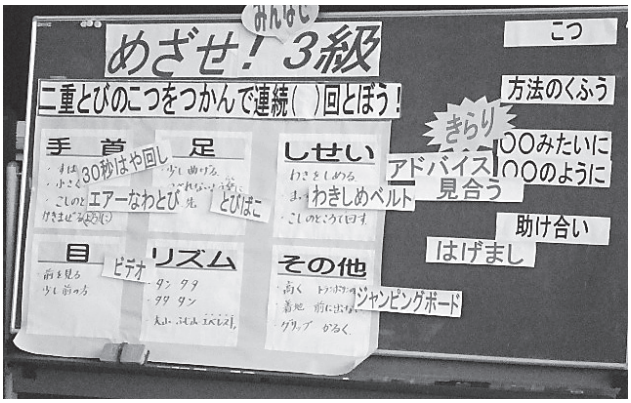
②具体的でイメージしやすい言葉によるアドバイス

グループで練習する中で，「跳ぶリズムは，〈大山・富士山・エベレスト〉と言いながらやると，いいよ。」「手首を速く回すのは，クリームをかきまぜるようなかんじ。」といったやりとりがあった。これらの言葉は，子どもならではの感覚で，友達がイメージしやすくわかりやすい表現を工夫しているものと考えられる。また，自分の動きやこつを見つめ，的確に表現した言葉でもある。

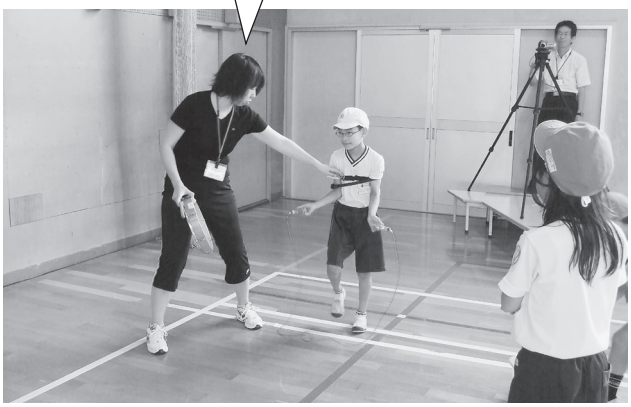
③課題に合った練習方法の工夫

グループで練習する中で児童が考え出した練習方法や新たな練習方法を整理し，自分の課題に合った方法で練習する場を設けた。二重跳びの感覚をつかめないでいる児童には「上手な人のビデオ視聴」や「ジャンピングボード」など，手首を速く回したい児童には「30秒速回し」，脇が離れてしまう児童には「脇しめベルト」というように，様々な練習の場を用意した。３人グループで教えてもらったポイントを生かすとともに，それぞれの場においても助け合いながら練習することを期待した。中でも本時で初めて使用する「脇しめベルト」は好評で，自分の課題を意識して練習したり，「お助けマン」も試してみてあらためて姿勢を確認したりしていた。ここでも３人グループは，効果的にかかわり，互いに練習方法を工夫しながらアドバイスを繰り返す姿が見られた。

ポイントを明確にした板書



脇しめベルトを使ってごらん



（５）考察

①動きのポイントをつかんだかかわり合い

グループでの練習や全体での話し合いにおいて，技の習得のために必要な動きのポイントを明確にしたアドバイスをし合うことが技能の向上につながった。特に，互いに見合うポイントを焦点化したカードやポイントに合った練習方法を提示したことは有効であった。ただし，児童同士で的確に相手の課題となっているポイントを助言することは容易ではなく，スモールステップで練習する経験を重ねたり，場に応じて教師が指導や支援を加えたりすることも重要であると感じた。

②学習課題のあり方

児童の実態に合った課題を設定することは，みんなで課題の達成を実感し，喜び合える瞬間が生まれることにつながる。今回は，二重跳びができるようになった児童が複数おり，教え合うことによって喜びを感じた児童も少なからずあった。また，初めて二重跳びができた児童は，休み時間も続けて練習し，できる喜びや縄跳びの楽しさを実感している姿が見られる。ただし，単元を通してみると，「めざせ！３級」というところには十分に至ったとは言えない。例えば４級や５級の段階であっても，みんながリズムを合わせ，最後まで跳ぶことによって，本時とは違った達成感もあったと思われる。児童の技能習得の状況に合わせて，学習課題を見直していくことも検討していきたい。

【実践事例３】　第５学年

（１）単元名　　レッツ　エンジョイ　ユニホック　（ボール運動）

（２）単元の目標

〇めあてに応じたスティックさばきや，チームの作戦を意識した動きをすることができる。（技能）

〇ルールやマナーを守りながら，最後まであきらめずにゲームを楽しんだり，役割を分担して互いに協力したりしながら活動しようとしている。（態度）

〇自分やチーム，ルールや作戦について課題をもち，課題解決のための方法や作戦を友だちとかかわりながら工夫している。（思考・判断）

（３）指導の意図

本単元では，児童の実態からチームでアドバイスし合あったり，励まし合ったりしながらゲームや練習をすることにより，仲間とかかわる力を育てみんなでユニホックをすることの楽しさを味わえる授業を目指した。

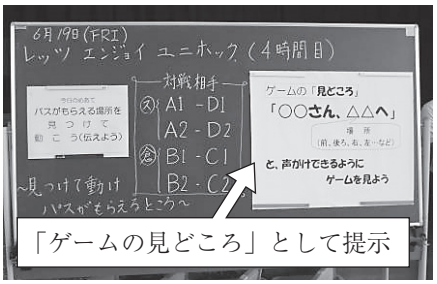
そのために，学習形態としては少人数男女混合チームを作り，２チームずつをペアチームとして設定した。ペアチームがゲームを行っているときには，ゲームを見る視点を与え応援やアドバイスなどが積極的にできるようにした。また，学習過程の中に振り返りタイムを設け，ペアチームが一緒になってお互いのゲームを振り返らせることにより，よかったところを認め合ったり，直していったほうがよいところを確認し合ったりした。

さらに，ゲームを成立させ，自分たちの作戦を有効に使えるようにするため，個人の技能を高めるスキルゲームを考えた。その際には，個人，ペア，チームの成績を記録し，その伸びがわかるようにしたり，スキルのコツを話し合う時間を設定したりすることによって，友だちのよさを積極的に見つけて伝えることができるようにした。また，実際にスキルゲームを行う際には，励ましや応援，アドバイスなどの声がけを積極的に行うようにした。

（4）指導の実際

①ゲームを見る視点の設定

本時は「パスがもらえる場所を見つけ，そこへ移動しながら攻撃する」という課題を解決するために，チームで作戦を考え，ゲームで確かめる時間であった。ここでもペアチームを生かし，ペアチームがゲームを行っているときは励ましや賞賛，アドバイスなどの声がけを行ったり，ゲーム後に評価し合ったりする活動を取り入れた。その際には，ただ漠然とゲームを見るのではなく，ゲームを見る視点を「ゲームの見どころ」として提示し，課題解決につながる声がけを期待した。



「ゲームの見どころ」として提示

日ごろゴール型の運動を経験している児童を中心に，「前，前！」「スペースへ移動して！」「左が空いているよ！」などの声がけをする児童が見られた。しかし，そうでない児童は，なかなかパスがもらえる場所を意識しながらゲームを見ることができず，「がんばれ！」「惜しい，惜しい！」「ナイス！」「よしっ！」というような声がけに終わることが多かった。

②ペアチームによる振り返りタイム

前時から「ペアチームとたくさん伝え合って，強いチームを作り上げよう」と，ゲーム前半終了後に振り返りタイムを設定した。

話し合いの場面では，「○君はドリブルがうまかった。」「キーパーでボールを止めていてすごかった。」「ボールをちゃんと見て動いていた。」「相手のボールを奪っていた。」「パスがもらえるようなところへ動いていた。」「空いているスペースに動いていた。」「味方にパスがいくように，ちゃんとパスをしていた。」「ボールをもらったら，前を見て味方を探していた。」「積極的に動いていた。」など，お互いのよさを伝え合うことができた。また，ただ言葉で伝えるだけでなく，ホワイトボードを積極的に使わせることにより，実際の動きのどんなところがよかったのかを視覚的にも伝え合うことができた。

振り返りタイムを始めてから２時間目であったので，伝え合い方に子どもたちがまだ十分慣れていなかったり，ゲームを見る視点に沿って伝え合うという要求が高度だったりしたため，ねらいに迫るような深い話し合いはなかなかできなかった。しかし，中には「○○さんはゴールに向かって動いていてよかった。」というアドバイスを受け，後半動きが見違えるように変わった児童もいた。

（5）考察

子どもたちは，スキルゲーム中にペアチームの仲間を大きな声で応援したり，新記録が生まれた時などには称賛したりする姿がとてもよく見られた。ゲーム中も同様に応援，励まし，称賛の声をペアチーム同士かけ合うことができた。こういった情意面でのかかわりを意図的に作っていく上で，ペアチームを組み学習を進めていくことはとても有効なものであったと考える。しかし，学習のねらいにせまる声がけなど，自分が見つけたこと，考えたこと，わかったことを伝えながらかかわろうとする姿はまだ十分に育っていない。そのような課題を解決するには，以下の３点について今後さらに考えていかなければならない。

○学習課題やそれに応じて考えられるゲームを見る視点のレベ

ルを，もっと低次の児童の実態に合わせたものにする。
○子どもたちが頭の中でイメージしやすい学習課題を設定する。
○伝え合いの内容や方法を吟味し，授業の中で繰り返し指導していく。

【実践事例４】　第６学年

（１）単元名　　病気の予防　～病気のおこりかた，予防の仕方を探ろう～（保健）

（２）単元の目標

○自分たちの周りにある病気に関心をもち，病気の予防・予防法などについて調べ，自分の生活に生かそうとすることができる。（態度）

○病気は，病原体・環境・生活のしかた・体の抵抗力がかかわり合って起こることや，それぞれに対して適切な対策を取ることで予防できることがわかる。（思考・判断，知識）

（３）指導の意図

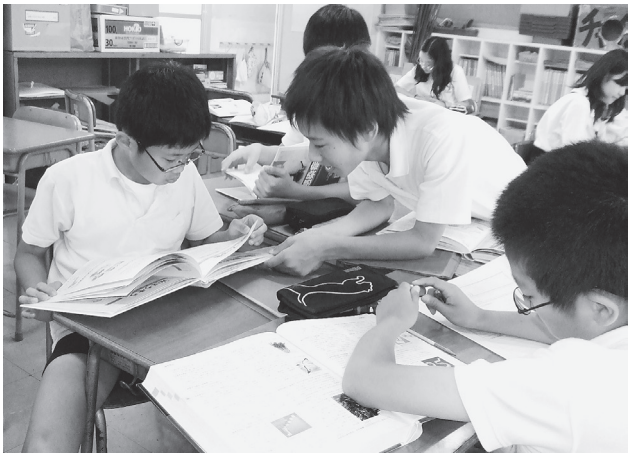
本単元「病気の予防」では，インフルエンザのような病原体によって起こる病気をはじめ，生活習慣病などがどのようにして起こるのかを探り，それらの病気をどのようにして予防していけばよいのかを理解するとともに，病気にかからないために今後どのように行動していくのかを意識付けることをねらいとして取り組んだ。病気を引き起こす原因として，病原体，環境，生活のしかた，体の抵抗力という４つの要因がかかわっていることを理解することは，子どもたちの病気に対する見方を変え，その予防法を考えながら行動することにつながっていく。具体的に言えば，病原体が体内に入るのを防ぐために手洗いやうがいをすること，マスクを着用することなどを理解することで，これまでは何となく取り組んでいた予防が，主体的なものへと変わっていく可能性があるということである。単なる知識の教え込みにならないためにも，子どもたちが自ら情報を収集，整理する過程においてグループでのかかわりを通して，病気の症状や原因などについて気づくようにしていく。また，調べたことを発表し，グループ内や学級全体で意見交換を行う中で，病気の予防に対する意識を高めていきたいと考えた。なお，本実践の大まかな展開計画は，以下の通りである。

第　１　時　かぜの原因と症状を知り，その予防法を理解しよう
第２・３時　病原体，環境，生活のしかた，体のていこう力がかかわって起こる病気やその予防法について調べよう
第　４　時　自分たちにできる病気の予防法について話し合おう

（４）指導の実際

第１時において，子どもたちはかぜの原因を考え，それらを整理することを通して，病気の原因が４つの要因（病原体，環境，生活のしかた，体のていこう力）のいずれかにかかわりがあることに気づいた。第２時に向け，かぜ以外の病気として聞いたことのある病気の名前についてアンケートをとった。子どもたちから出てきた病名は，合計53種類。病原体，生活のしかたに関わる病名が多かったが，熱中症など環境が主な原因となるものなども見られた。

第２時では，子どもたちから挙がった病名のうち９つの病気（①水ぼうそう，②流行性耳下腺炎，③麻疹，④熱中症，⑤喘息，⑥糖尿病，⑦脳梗塞，⑧白血病，⑨ガン）に絞り，その中から自分が調べてみたい病気を選び，友だちと協力しながら調べる活動に取り組んだ。病気を絞り込むにあたっては，たくさんの子どもたちが記載していたことと，病気の原因が偏らないことなどを条件として，教師の判断で行った。子どもたちは，病気の症状や原因，その予防法についてグループで協力しながら，図鑑などを参考に調べ活動を行った。



第４時は，９つのグループで調べた内容を発表し，その後，これらの病気を予防するには何が大切なのかについて，まず小グループで話し合った。

〔第６グループの話し合い〕

Ｂ児：何が大事かなあ。

Ａ児：病気にならないために，外に出ない。

Ｂ児：それはおかしいでしょう。

Ａ児：タバコを吸わないようにするといいんじゃない。

Ｃ児：規則正しい生活をすること。

Ａ児：朝，昼，晩ちゃんと食事をするのもだね。

Ｃ児：運動をすることも必要だと思う。（以下，略）

グループでの話し合いの後，学級全体で話し合う場を設けた。子どもたちからは，病気の予防としてさまざまな考えが出てきたが，特に生活のしかたを見直すことに関する意見が多く聞かれた。「生活のしかたを見直すことで，何が変わるの？」という問いかけに対して，子どもたちからは「体のていこう力が高まる。」という答えが返ってきた。体のていこう力を高めることが，様々な病気の予防につながるということを押さえて授業を終えた。

（５）考察

> 今日勉強して，手洗いうがいをしなきゃなと思いました。ぼくは，今までにいっぱい病気にかかっているから，防ぎ方を覚えたいなあと思っていました。（中略）ぼくはぜんそくをもっているので，今度からは気をつけたいと思いました。他の人の発表を聞いて，こういうことに気をつければいいんだなあと思いました。　Ｓ児

これは，第４時の学習後のＳ児のふりかえりである。自分が病気をしやすいのはなぜかという問題意識をもちながら話し合いに加わっていたので，他のグループの発表を決して他人事ではなく，自分のこととして考えようとしていることがわかる。単に知識を教え込むのではなく，子どもたちが自分で選んだ病気についてグループで調べ，発表をしたことによって，Ｓ児のように病気の予防のしかたに関する意識を高めることにつなげることができたと考える。ただ，グループによっては話し合う課題が伝わりきれていなかったり，話し合う時間が十分ではなかったりしたところもあり，話し合い自体が深まりのないものになっているところもあった。それらについて改善していくことが今後の課題である。

９　研究のまとめ

（１）成果

①課題設定について

・二人や集団での動きが合わないとできない運動やペアチームの活用など，子どもの実態に応じた課題を設定することで，友だちと教え合おうとする姿が見られ，かかわり合うことの大切さに気づくようになってきた。

②かかわり合いを取り入れた展開について

・子ども同士が教え合う場を設定したことで，子どもならではの言語や動きによって技能ポイントに気づき，技能の向上が見られ，より楽しく意欲的に運動に取り組むようになった。

・個人の技能を高める場，全体で技能ポイントを確認する場，ペア等で動きを見合う場などを設定することによって，技能ポイントを理解しできるようになる姿がみられた。その際，よい動きができる子を紹介したり，視覚に訴えるカードやビデオなどを利用したりして，子どもたちに見合う視点を与え共有化を図ることが効果的であることが分かった。

（２）課題

①課題設定について

・運動を苦手とする子どもに対しても，身に付ける能力を保障するために，できない子に合わせた課題の設定の仕方を考える必要がある。

・子どもたちが主体的に運動したり，健康について考えたりする子どもを育てるためには，課題が子どもにとって適切だったか，課題が子どもに受け入れられていたのかを明確にする必要がある。個の記録やアンケート，形成的評価による数値データの活用などを考えていきたい。

②かかわり合いを取り入れた展開について

・ねらいによって，どこでかかわりを重視して授業を展開するかを考える必要がある。

・ボール運動では，動きが分かっていないからゲームができないという実態があった。個人技能を保障するためのスキルゲームやボールを持たない人の動きを分からせるためのタスクゲームなどが必要である。タスクゲームやゲームにおける効果的なかかわりの手立てを考えていきたい。

・体つくり運動では，シンクロなど集団的要素を取り入れ，集団の喜びを味わわせる場面を取り入れたら良かった。こうした場面を取り入れることで，かかわり合いを通してより楽しく運動に取り組めるのではないかと考える。

・かかわり合った結果，子どもがどのように変容したかをみられる場面を設定し，変容した姿を態度面，技能面，知識面などから客観的に評価できるよう，形成的評価や仲間づくりの成果の評価，有能感の評価などを活用していきたい。

・かかわりによって主に低学年では態度面を，中学年では技能面を，高学年では知識面を育てるなど，低中高の発達段階を考慮し，学年に応じてかかわりを位置づけ，指導の重点を図る必要がある。

【参考文献】

文部科学省　　小学校学習指導要領
文部科学省　　小学校学習指導要領解説　体育編
文部科学省　　健やかな体を育む教育の在り方に関する専門部会
学体連会報　　新学習指導要領改訂のポイントと授業実践への期待
大修館書店　　体育科教育
明 和 出 版　　体育授業を観察評価する（高橋　健夫　編著）

研究主題

思いや考えを認め合い，互いに高め合う子どもを育てる

体育科研究主題

いきいきと運動や心身の健康づくりに取り組む児童の育成

ー豊かなかかわり合いを通してー

松江市立雑賀小学校

1　研究主題設定の理由

（１）社会的要請から

現代社会はますます急速に変化し，少子化，高齢化，情報化，国際化などの波が押し寄せている。文部科学省が行っている「体力・運動能力調査」によると，現代の子どもの体格は向上しているにもかかわらず，体力・運動能力は昭和６０年頃から現在まで低下傾向が続いていると報告されている。また，遊ぶ機会・仲間・場の減少や生活習慣の乱れなどから運動する子としない子の二極化現象，人間関係の希薄化，生活習慣病の増加など様々な問題が指摘されている。

このような社会で生きていくために，課題に対する自分なりの考えをしっかりともち，それを表現し，周りの人の意見を取捨選択しながら，共に解決していく力を身につけることが必要である。そのためにも，日々の授業や体験活動等を通して，まわりの人と積極的にかかわりながらそれぞれのよさを認め合うとともに，力を合わせて課題を解決し，よりよい社会を築いていこうとする子どもを育てたい。

（２）本校の教育目標から

本校の学校教育目標は「豊かな人間性をもち，たくましく行動ができる子どもを育成する」である。目標の「豊かな人間性」とは，自尊感情をもち，困難な場面に出会った場合でもそれを乗り越えようとする強い意志をもっていると同時に，自他の違いを肯定的に受け入れ，相手の立場を尊重し互いにかけがえのない存在であることがわかることと捉えている。また，「たくましく行動できる」とは，自分の考えをもって自らの力で解決に向かうこと，また，時には仲間と協力して課題を解決し実践することである。その過程において自分の考えをもち，それを互いに認め合い，高め合うことができるのではないかと考える。

（３）児童の実態から

本校の児童は明るく素直であり，穏やかに人と接することができる。学習においても，決められた課題を前向きにとらえ，まじめに取り組むことができる。しかし，自分から課題を見つける力や，自分なりの考えを様々な方法で分かりやすく表現する力はやや弱い。また，人の話を聞いて自分の考えを深めたり，一人ひとりの意見を生かしながら問題を解決したりすることができにくい面がある。

業間の休み時間や昼休みになると校庭に出て，元気に遊ぶ児童も見られるが，あまり運動や外遊びを好まず教室や図書館で過ごす児童も見られる。また，外遊びを好む児童も遊びがパターン化しており，遊びを通していろいろな運動に親しんでいるとはいえない現状である。帰宅後は，運動に親しむことへの二極化がみられ，児童の体力・運動能力の差が大きくなっている原因の一つとも考えられる。学校外での学習や室内遊びに夢中になり，日常生活におけるスポーツ活動から本来の運動の楽しさを味わうことが少なくなってきている。その反面，低学年の頃から専門的な技能・技術を教わり，「試合に勝利する」ことが大切なことと指導されてきた児童は体力・技

能・知識は秀でているものの，自ら創意工夫し高めていく力や他の運動への応用力は十分ではない傾向がみられる。

そこで，体育科においても自ら課題を見つけ，自分なりの方法で表現し，さらにそれを認め合いながら共に高まっていこうとする子どもを育てる必要があると考える。

（4）これまでの研究経緯から

本校では，一昨年度まで国語科を中心として，「思いや考えを伝え合い，互いに高め合う子どもを育てる」という研究主題のもと，「話すこと」「聞くこと」の力を伸ばしながら，さらに「幅広い表現力」を身につけ，生き生きと自分の思いや考えを伝え合い，より一層高め合う集団として成長していくよう指導してきた。また昭和５８年度より本校は松江市教育委員会の人権・同和教育実践継続指定校であり，人権・同和教育を全教育活動の基底に据え，一人ひとりの考えや立場を大切にし，認め合い支え合う学級づくり・学校づくりに努力してきた。

昨年度からは，一昨年度まで育成してきた力を基盤に，自分を大切にし，お互いを尊重し合いながら人とかかわり，共に認め合い高まろうとする子どもを育てたいと考え，研究主題を「思いや考えを認め合い，互いに高め合う子どもを育てる」とし，実践を積み重ねてきている。

本年度も引き続き，真に相手を認め合い，共に高まろうとする子どもを育てていきたいと考え，本主題を設定して取り組んでいるところである。体育科においても今まで培ってきたことを生かし，認め合いながら共に高まっていくことをめざしていきたいと考えている。これまでの実践をもとに，豊かなかかわり合いを通し，いきいきと運動や心身の健康づくりに取り組む児童の育成をめざして，授業づくり，基盤づくりを行っていきたい。

２　研究主題の捉え

◎「思いや考えを認め合う」とは

・課題を主体的にとらえ，自分で判断したり決定したりして思いや考えをもつ。
・自分の考えに自信をもち，自分なりの方法で表現する。
・相手の思いや考えを聞き，その思いや考えを受け止める。
・相手を意識して思いや考えを伝え，お互いの立場や考えを尊重しながら，自分や相手の考えのよさ，違いを分かり合う。

◎「互いに高め合う」とは

・思いや考えを交流することで，自分の考えを広げたり深めたりする。
・よりよい考えを導き出すため，お互いの考えのよさや違いを生かして討論しながら練り上げていく。
・練り上げた考えや方法をもとに，友達と協力し合いながら課題解決に向けて努力し積極的に行動する。

体育科研究主題の受けとめ

◎「いきいきと運動や心身の健康づくりに取り組む」とは

・運動や保健のもつ特性にふれながら，意欲的に学習に取り組む。
・生涯にわたって運動に親しんだり，健康的な生活を送ったりするための基礎的な知識や技能を身につけている。
・学んだ知識や技能を生かして，主体的に運動したり，自他の健康について考えながら生活したりする。

◎「豊かなかかわり合い」とは

・課題を主体的にとらえ，自分なりの方法で表現する。
・相手の思いや動きを見聞きし，その思いや動きを受け止める。
・お互いを尊重しながら，自分や相手の思いや動きのよさ，違いをわかり合い，「励ます」「助言する」「見合う」「補助する」などをする。

3　研究目標

いきいきと運動や心身の健康づくりに取り組む児童を育てるためには，どのような豊かなかかわり合いが有効か実践を通して明らかにする。

4　めざす児童像

（1）楽しみながら運動する子
（2）かかわり合いながらともに伸びようとする子
（3）学んだことを生かす子

5　研究仮説

運動の特性に応じた手立てや，身近な生活の中での健康安全に関する課題に応じた手立てを工夫すれば，豊かなかかわり合いが生まれ，いきいきと運動や心身の健康づくりに取り組む児童が育つであろう。

6　研究内容・方法

子ども同士が豊かにかかわり合いながら，ねらいを達成するために，以下のような手立てを工夫する。

（1）課題設定
・かかわり合いに必然性を生む課題
・ねらいを達成するための意欲や意識の高まりを生む課題

（2）運動の特性や，健康安全に関する課題に応じたかかわり合いを取り入れた展開
〇かかわり合いの場
［課題を把握する場］［課題を解決しようとする場］［見直す場］［高める場］［ふり返る場］
〇かかわり合う相手
［二人組の相手］［グループ内］［学級全体］
〇かかわり合い方（姿）
［アドバイス］［評価］［応援，励まし］［賞賛］［対話］［見合う］［補助する］
［一緒に運動する］

（3）子どものかかわり合いを支える教師の声かけ・工夫
［コツ，ポイントの提示］［モデリング］［ルールの工夫］

7　研究の実際

【第２学年の取組　ゲーム】

（1）単元名　　みんなで楽しくゲームをしよう　～ボールはこびおにを通して～

（2）単元の目標
〇きまりを守りながら，友だちと仲よく，ボールはこびおにに進んで取り組もうとしている。（関心・意欲・態度）
〇ボールはこびおにの動き方を知り，攻め方を見付けることができる。（思考・判断）
〇相手のタッチを交わしたり，相手を追いかけてタッチしたりする動きを身につけてボールはこびおにをすることができる。（技能）

（3）指導について
児童のアンケートの結果やこれまでの学習の様子から，まず，どの子にも攻めることと守ることの両方を楽しんで取り組めるようにしていきたい。また，単元を通して，チームで作戦を工夫したり，励まし合ってゲームに取り組んだり，豊かなかかわり合いを大切にして，集団でゲームをする楽しさを味わわせたい。また，特に後半は，ルールについて問題点などを話し合い，工夫して変えていく場をもちたい。そこで，以下のような手立てのもと指導にあたっていきたい。

①基礎技能をつくる場（個人技能づくり）

毎時間学習の最初に，体をほぐす運動としておにあそびをする。逃げたり追いかけたりする動きを通して，走る力を身につけられるようにしていきたい。

また，チームで作戦を立てた後，色別に練習をする。この時は，攻守に分かれて，ボールは使わずにスタートからゴールを目指す。相手をより意識して，攻めたり，タッチしたりすることで，相手を交わす動きや相手をゴールに行かせないような動きを養っていきたい。また，個人技能を高めるとともに，自分達の作戦を試す場として設定したい。

②豊かなかかわり合いをもつ場

（ア）かかわり合いの場の工夫

チームで「パワーアップタイム」として作戦タイムを設定し，作戦を考え確認し合う。授業の終わりには，きらきらタイムとしてふりかえりの時間をとり，その時間に頑張っていた友だちを知らせ合う。また，毎時間，学習カードでふりかえりをし，自分や友だちの頑張り，友だちの良いところを書く。

（イ）相手とのかかわり合いの工夫

チームは，１チームを６人編成（色別12人を男女混合で二つに分ける。同じ色の２チームは兄弟チーム）にする。それにより，

・一人ひとりがより多くボールをゴールまで運ぶチャンスが得られる。
・相手をつかまえるとき，よりねらいながら追いかけることができる。
・話し合いなどで，一人ひとりの考えが生かしやすく，その良さを感じやすい。
・ゲームをしている兄弟チームを応援したり，審判をしながら友だちのプレーを見たりすることで，友だちの良さを見つけ，より教え合い励まし合う場がもてる。

（ウ）かかわり合い方の工夫

相手を大切にし，相手に自分の気持ちが伝わるような，話し方，聞き方，練習やゲームでの声かけ，応援の姿が見られるようにしたい。そのために，よいかかわり合い方を示していきたい。

③ルールについて

〈はじめのルール〉

●時間は１分間～２分間
●１チーム６人
●攻撃側
　・コーンの間を，ボールを持ったままで越える（トライ）と得点できる。
　・タッチされたら，スタートの線からやり直す。
●守備側（おに）
　・線の間だけを動くことができる。
　・タッチをして，ボールを運ばせないようにする。

これは，基本的なルールである。ゲームをするごとに，学習のまとめや話し合いの中で，困ったことや迷ったことなどを出し合い，児童の声や実態に応じてルールを変更していく。

（４）本時の学習

①ねらい

・友だちと励まし合って，楽しくボールはこびおにをしようとする。

・相手の動きをよく見て，ボールを運んだり，タッチをしたりすることができる。

②展開

時間	学　習　活　動	教師の支援（Ｔ１，Ｔ２）	Ｔ３
３分	１．ほぐしの運動として，「あみなげた」をする。	・簡単なゲームを通して，体を慣れさせる。	特別支援学級の児童の支援に当たる。
２分	２．今日の学習のねらいとルールを確認する。	・本時の学習の流れとおよその時間，ルールをわかりやすく提示する。	
	友だちと力を合わせて，楽しくボールはこびおにをしよう。		
３分	３．パワーアップタイムで，作戦を確かめ，兄弟チームで練習をする。	・チームをまわり，よい作戦を立てているところ，声をかけ合っているところをほめ，意欲を高める。 ・Ｔ１は，Ａコート側，Ｔ２は，Ｂコート側の様子を観察し，声かけをする。	
12分	４．ゲーム①をする。 Ａコート（ステージ側） ・１試合３分×３試合（攻守１分半ずつ） Ｂコート ・１試合３分×３試合（攻守１分半ずつ）	・ゲームの中でよい動き，工夫した動きを見つけてほめ，他の児童の参考になるようにする。 ・意欲が低下しがちな児童がいたら，称賛，励ましの声かけをする。	
５分	５．パワーアップタイムでゲーム①の反省をする。	・自分達の立てた作戦がどうだったか，チームごとにふりかえり，次はどうすればよいか考えるようにする。 ・全体に広げたい動きがあれば，教師から知らせ，次のゲームに生かせるようにする。	
12分	６．ゲーム②をする。 Ａコート（ステージ側） ・１試合３分×３試合（攻守１分半ずつ） Ｂコート ・１試合３分×３試合（攻守１分半ずつ）	・ゲーム①と同じ支援を行う。 ・パワーアップタイムで話し合ったところに気をつけてゲームができるよう声かけをする。	
８分	７．きらきらタイムで学習の振り返りをする。 （予想される児童の発言） ・～点，入れることができてうれしかったよ。 ・～さんに「すごいね」と言われてうれしかったよ。 ・「～するといいよ」と教えてもらって，その通りやったら，うまくいったよ。 ・～さんのボールの運び方がとても速かったよ。	・チームで頑張ったところや協力したところ，励まし合いができたところをふりかえる。 ・友だちの頑張っていたところや声をかけてもらって嬉しかったことを発表し，次の学習の意欲づけとする。 ・出てきた発言から，どのような様子か問い返し，具体的な事柄を挙げ，全体に広げるようにする。 ・学習後，学習カードに本時の評価とふりかえりを書き，次の学習に生かせるようにするとともに，児童の思いを教師が把握できるようにする。	
	８．片づけをする。	・安全にすばやく片付けられるように，声をかけたり，手をかしたりする。	

（５）本時における考察

①「パワーアップタイム」における話し合い

ゲーム前のパワーアップタイムでは，事前に立てた作戦を確認するとすぐに，兄弟チームで練習を始めていた。これからのゲームを頑張ろうという意欲の高まりを感じた。

ゲーム①のあとのふり返りでは，前半の試合結果によって，それぞれのチームの話し合いの雰囲気に違いが見られた。しかし，どのチームもゲーム①の結果を受けて，次はさらにいい作戦を立てよう，勝てるように頑張ろうという気持ちをもって話し合いをしていた。

Ｔ１がＡコートの３チーム，Ｔ２がＢコートの３チームの様子を見て回った。指導者２人で対応することができたが，一つのチームをずっと見ることはできず，また，時間に限りがあるので十分な声かけができていたとは言えない。

また，作戦の立て方として，攻めと守りのどちらを立てるか，特に決めていなかったので，チームによって守りだけを考えたところ，守りと攻めの両方を考えたところと様々だった。いかに，点を入れるか，攻めを中心に考えることを示すとよかった。また，教師から，全体に広げたい動きを示したが，チーム毎に分かれていたので全体を集めて「この動きをよく見て」と示すと，より注目させることができた。

②「きらきらタイム」における振り返り

ゲーム②のあとの振り返りでは，全員が汗をかいて，顔を真っ赤にして，息を弾ませながら集合した。その話し合いでは，「２回目のパワーアップタイムに，後ろは３人，真ん中は２人に作戦を変えたら良くなってよかったです。」「～さんが『頑張れ』って応援してくれて嬉しかったです。」「～くんが後ろから攻められたとき，体をねじって走っていてすごいと思いました。」

など，チームで協力できたことや励まし合いができたこと，また友だちの良い動きに注目した発言が聞かれた。互いが認め合い，次につながるふり返りをすることができた。

【第５学年の取組　ボール運動】

（１）単元名　　みんなが楽しめるボール運動をしよう　～ゴール型ゲームを通して～

（２）単元の目標

○ルールやマナーを守り，友だちと助け合ってバスケットボールに進んで取り組もうとしている。（関心・意欲・態度）

○チームの特徴に応じた攻め方を考えることができる。（思考・判断）

○攻撃側に易しい状況の中でパスやシュート，ドリブルなど，基本的なバスケットボールの技能を身につけてゲームをすることができる。（技能）

（３）指導について

①基礎技能をつくる場（個人技能づくり）

パス，キャッチ，シュートなどに対する子どもたちの不安や恐怖心を取り除けるように，４種類のスキルゲームを繰り返し行い，基礎技能を養っていきたい。この時間で運動量の確保をしっかり図っていきたい。

【スキルゲーム】

・思いやりパス（３m間隔で同じチームの仲間で対面パスをする。30秒で何回パスできるか記録する。数をみんなで数えながら運動するようにしたい。片足を一歩踏み出してチェストパスでパスをすることを意識させたい。）

・２人でピポット（２人組になり，ボール保持者と守備者に分かれ軸足を動かさないようにしながらボールと守備者の間に体を入れながらボール保持する感覚を身につけさせたい。）

・ぐるぐるドリブル（８mの直線上に２mおきにコーンを置き，ジグザグドリブルをしながら往復する。慣れてきたら，左回りのときは右手で，右回りのときは左手でドリブルする。30秒で

何回行き来できたかを記録することで技能の向上を実感させたい。）
・ゴール下シュート（ゴール下のいろいろな場所からシュートを打つ。シュートの位置の目安として，45度，90度の位置を意識させる。リバウンドを取ってすぐに打つように意識させる。30秒で何回ゴールできたかを記録させることで技能の向上を実感させたい。）
【タスクゲーム】
・２対１のシュートゲーム（２対１の攻守に分かれ，ゲーム形式で行う。）
・３対２のシュートゲーム（３対２の攻守に分かれ，ゲーム形式で行う。）
②豊かな関わり合いをもつ場
（ア）かかわり合いの場の工夫
学習のすべてを通して認め合い，教え合い，支え合ってほしいと願っているが，より友だち同士のかかわり合いがもてるように下記の３つの場面を意図的に学習展開の中に組み入れた。

○「タスクゲーム」で，兄弟チームの動きを見たり，アドバイスや賞賛，励ましをしたりする。
○「きらりタイム」で，兄弟チームのよい動きを伝え合ったり作戦に生かしたりする。
○「今日のMVP」で，言われてうれしかった言葉やよいプレーをしていた友だちを伝え合う。

（イ）相手とのかかわり合いの工夫
チーム編成を８チームとし，２チームずつを兄弟チームにして組む。タスクゲームをする際，運動量は減るが友だちのよいプレーに着目したりお互いにアドバイスや賞賛したりする経験ができるようにするために「兄弟チーム」でプレーを見合うようにする。また，ためしのゲームでも，「兄弟チーム」の得点の合計で勝敗を決めるようにすることで，お互いを応援したり励ましたりする態度が見られるようにしたい。

（ウ）かかわり合い方の工夫

○タスクゲームでのお互いを見合う場面で賞賛したり応援したり，アドバイスしたりさせたい。
○「きらりタイム」で，スキルゲームでの効果的な動き（シュート，パス，空きスペースへの動き出し）について対話させていきたい。
○ためしのゲームの際，「兄弟チーム」で応援したり励ましたり賞賛したりさせたい。
○「今日のMVP」で，　自分が言われてうれしかった言葉や，よいプレーをしていたりそれを友だちに伝えたりしていた友だちについて伝え合うようにさせたい。

③ルールについて
必要に応じて下記に示すルールを指導者から提案してみることも考えている。

【教師が提案したいルール】
①全員がシュートしたらボーナス得点５点（シュートをした児童から帽子を取る）
ねらい・・・たくさんの子どもがシュートできるように子どもに意識させたい。
②最初のシュート３点，後は１点
ねらい・・・同じ子どもが連続してシュートしても，大量得点につながらないようにすることで，たくさんの子どもにシュートチャンスを与えたい。

これらにより，よりたくさんの子どもがボールに接球できる機会を確保したい。

（4）本時のねらい（5／8）

①ねらい

・友だちのよいプレー（シュート，パス，スペースへの動きや声）を見つけ，伝えることができる。

②展開

時間	学　習　活　動	教 師 の 支 援
2分	1　今日のねらいと学習の流れを確認する。	・見通しをもって学習に取り組むために，今日のねらいと流れを確認する。
	友だちのよいプレーを見つけ，伝え合おう	
	2　スキルゲームをする。 （1）ゴール下シュート（個人　30秒2回） （2）ぐるぐるドリブル（個人　30秒2回） （3）思いやりパス（チーム　30秒2回） （4）ピポット（2人組み　30秒2回） 【意識させたい動き】 ボードの四角をねらってシュートする。 左右でドリブルする。 数を数えあい，相手の胸にパスをする。 ボールと守備者の間に体を入れる。	・意識化させたい動きに着目できるような声かけをしたり，意識しながら運動している子どもを見つけ賞賛したりする。 ・運動量の確保，効率化のために音楽をかける。 ・全体の伸びを感じられるように，ゴール下シュートの記録を集計し伸びた班を賞賛する。 ・ポイントを意識して動いていたり，積極的に声をかけ合っていたりした班を紹介し，タスクゲームへの意識のつながりを図る。
8分	3　タスクゲームをする。 ○2対1のシュートゲームをする。 ①全体で6セット行う。 ②1セットごとに班を交替 ③1セットごとに攻守のメンバー交代 ＊プレーをしていない子どもは，兄弟チームの友だちの動きを見て，アドバイスや励まし，賞賛する。 【意識させたい動き】 ○ボールをパスしたら動く。 ○空きスペースや守備者から角度をつけた場所に動く。 ○パスがほしいときに手を挙げたり呼んだりする。 【プレーに迷ったとき】 まずシュート，できなければパス，無理ならドリブルの順に考える。	・ボールを呼ぶ声や空きスペースへの移動など，意識化させたい動きに着目できるような声かけをしたり，意識しながら運動している子どもを見つけ賞賛したりすることで意欲を高めたり，プレーをしていない子どもにプレーを見る視点を与える。 ・運動量の確保，効率化のため音楽をかける。 ・運動に苦手意識をもっていたり，技能的に未熟な児童の様子を観察し，励ましたり動き方をアドバイスしたりする。

15分	4　きらりタイムで相談する （1）タスクゲームでの友だちのよい動きを伝え合う。 （2）　3対3のゲームでの作戦を考える。 【ねらいたい話し合いの姿】 ○～さんの～の動き（声）がよかったよ。 ○～をしたら，もっとよくなるんじゃない。 ○かべパス作戦でいこう。 ○ボールを投げたら動くようにしよう。 ○シュートが打てるときは「シュート」と言おう。　など	・チームのキャプテンが話し合いの進行役をする。兄弟チームのよいプレーやチームの作戦に対して積極的に話し合っているチームを賞賛したり，話し合いがうまくいっていないチームに助言したりする。
15分	5　ためしのゲームをする。 （前半3分後半3分） Aコート（ステージ校舎側） 【第1試合】　1班　対　3班 【第2試合】　2班　対　4班 Bコート（ステージ道路側） 【第1試合】　5班　対　7班 【第2試合】　6班　対　8班 【ねらいたい子どものかかわり】 兄弟チームを応援したり動きをほめたりする。 シュートにつながるプレーやどう動いていいか困っている友だちにアドバイスをする。	・兄弟チームの友だちのよい動きに注目できるような声かけをしたり，作戦を意識した動きをしている子どもを見つけたりし，賞賛する。 ・兄弟チームで応援したりアドバイスしたりしている子どもを見つけ賞賛する。 ・運動に苦手意識をもっていたり，技能的に未熟な児童の様子を観察し，励ましたり動き方をアドバイスしたりする。
5分	6　ふりかえりをする。 【ねらいたい発言の内容】 ○自分が言われてうれしかった言葉 ○よいプレーをしていた友だちの様子 ○よいプレーを見つけようとしていたり声をかけていたりした友だちの様子 7　片づけをする。	・試合前や後に整列しあいさつをしたり，勝敗に素直に従うように声をかけたりする。 ・全体が集合した場所で挙手を求め，数名の児童に振り返りをさせる。その後，学習カードに記入させる。 ・安全にすばやく片付けられるように，声をかけたり，手をかしたりする。

（5）本時における考察

①タスクゲームときらりタイム

○グループごとに作戦ボードを用いて，チーム内で見せ合い考えていた。作戦ボードの使用は，児童が自分の考えを具体的に伝えやすくしたり，かかわり合いを増やしたりするのに有効であった。

○タスクゲームの際，兄弟チームが同じコート内で交互に練習をするようにした。その後，きらりタイムでお互いのプレーのよさを伝えたりアドバイスをしたりする学習過程を組んだ。そのことにより，兄弟チームのよい動きや声かけを見つけ，伝え合う姿が見られた。

○チームによっては，兄弟チームのアドバイスを生かし，一緒になって教え合う姿が見られた。

②チーム作りの工夫

○兄弟チームが同じコートで前後半に分かれて試合をするようにした。そのことにより，兄弟チームに積極的にアドバイスを送る姿が見られた。また，兄弟チームの得点の合計で勝敗が決まるようにした。そのことで，より試合中にお互いのチームを応援し合う姿が見られた。

③終末でのふりかえり（今日のＭＶＰ）

終末でのふりかえりの場面では，［ふやしたいよい言葉や行動］［なくしていきたい言葉や行動］［広めていきたいよいプレー］の３点で話し合いをもった。

○本時の［ふやしたいよい言葉や行動］では，「言い過ぎてごめん。」「パスカットをしてナイス，いいプレー」など，自分のしたことに対する反省や兄弟チームの具体的なプレーをほめたり認めたりする声かけなど，児童がうれしかった言動について発表しあい，友だち同士の望ましいかかわり合い方について考えることができた。

○本時の［なくしていきたい言葉や行動］では，「ファールをして時間をかせぐ」「審判が言っていないのにファールと言ってしまう」負けた腹いせに「まぐれで勝ったと言われた」など，勝敗にこだわり負けたことで相手チームに心ない言葉を言ったり，望ましくないプレーについての意見が出されたりした。児童の実態から出てくる上述のような言動を，指導のチャンスととらえ，ルールを工夫したり，望ましいマナーを確認し合ったりすることで，児童が共通の思いをもってゲームができるようにした。また，視覚的にも確認できるように意見を書き出し提示することで，意識化を図った。

○本時の［広めていきたいよいプレー］では，「ゴール下のリバウンドをしっかり取る」「相手の裏をとっていたのでパスがしやすかった。」「７班全員がパスアンドランというのが浸透していて勝てたと思う。ぼくたちもやりたい。」「Ａさんがいろんなところに走っていた。」など，ゲーム中のよい動きについて意見が出た。「相手の裏をとる」という動きについては，作戦ボードで説明するように発表した児童に補足を促したが，伝わりにくかった。実際に班のメンバーによる実演を促せば，より伝えることができたように思う。

８　研究のまとめ

（１）　成果

①課題設定について

体育の時間では「かかわり合いに必然性を生む課題」「ねらいを達成するための意欲や意識の高まりを生む課題」を設定してきた。例えば，「友だちと力を合わせて，楽しくボール運びおにをしよう」「友だちのよいプレーを見つけ，伝え合おう」である。これらの課題は子どもたちの話し合いの中からつくる，子どもと指導者が話し合ってつくる，指導者の側から示すなど，つくり方は様々であるが，授業の初めに確認したり，授業をふり返る時のポイントにしたりしてきた。そのことで，チームの中で教え合ったり，かかわり合ったりする姿が多く見られた。また，チームみんなで力を合わせ，相手よりたくさん点を取ろうという意識も高まった。

②運動の特性や，健康安全に関する課題に応じたかかわり合いを取り入れた展開について〈豊かなかかわり合いをもつ場を工夫したこと〉

豊かなかかわり合いをもつ場として，「かかわり合いの場の工夫」「相手とのかかわり合いの工夫」「かかわり合い方の工夫」の３つをポイントにして手立てをしてきた。

「〇〇タイム」「今日のＭＶＰ」などとしてゲームや全体のふり返りの時間を設定したことは，個人やチームの力を高めるとともに，他の仲間の頑張りや態度に目を向けることにつながった。そして，毎回，学習カードにめあてや頑張ったこと，友だちのいいところを書くことにより，自分や友だちのいいところを見つけることができた。それは，ただ「がんばった」というものではなく，「こんな言葉が嬉しかった」とか，「～さんのこんな動きを手本にしたい」など，より具体的になっていった。

③子どものかかわり合いを支える教師の声かけ・工夫について〈ルールの工夫〉

教師がいきいきと運動する子どもを思い浮かべルールを工夫したとき，次のような動きがみえた。

２年生では話し合いのときの，児童の表情や発言から，自分たちでルールを作り上げていくことの嬉しさや学習に対する積極的な気持ちが感じられた。ルールが変わることによって，そのためにどうしたら勝てるか，といった作戦を立てる話し合いも活発になり，意欲が高まった。

５年生では，「全員がシュートしたら，ボーナス得点を５点入れる。」「同じ児童の最初のシュートは３点，２本目からは１点にする。」というルールを提案したことで，児童は意識的にグループ内でパスを回し，全員がシュートを打てるように工夫しながらゲームをする姿が見られた。また，同じ子どもが連続してシュートしても大量得点につながらないので，個人で攻め込もうとする姿が減り，チーム内の他の児童にシュートチャンスを作るような動きがたくさん見られた。また，フリーになる動きやゴール下での動きなどを，積極的にチーム内で話し合う姿が見られた。

（２）　課題

①課題設定について

課題設定については，よりかかわり合いに必然性を生む課題，ねらいを達成するための意欲や意識がさらに高まりを生む課題になるよう実践を重ねていかなければならない。

②かかわり合いを取り入れた展開について〈関わり合い方〉

効果的な動きを伝えたくても，うまく動きを言葉で表現できにくい場面もあった。「プレーをとめて確認する。」「モデルになるプレーをやって見せる。」「一緒に動きながら伝える。」など，様々な伝え方の工夫が大切である。

③子どものかかわり合いを支える教師の声かけ・工夫について〈ルールの工夫〉

ルールについて話し合いを進めると，児童の表現や発言から，自分たちでルールを作り上げていくことの嬉しさや学習に対する積極的な気持ちが感じられた。ただ，全員の考えを集約するには児童の考えの吸い上げ方，時間設定に工夫が必要である。